
ラブカクテルス その４３

風 雷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブカクテルス その43

【Nコード】

N4310D

【作者名】

風 雷人

【あらすじ】

今宵は苦勞の末にできたカクテルをお作りしました。ご賞味あれ。

いらっしやいませ。

どうぞこちらへ。

本日はいかがなさいますか？

甘い香りのバイオレットフィズ？

それとも、危険な香りのテキーラサンライズ？

はたまた、大人の香りのマティーニ？

わかりました。本日のスペシャルですね。

少々お待ちください。

本日のカクテルの名前は鼻かに合戦でございます。

ごゆっくりどうぞ。

俺はぽかぽか陽気の縁側で、うとうとと昼寝をしていたのだった。

日頃の疲れが溜まった日曜日の昼過ぎ。

誰もがこの心地よさに誘われ、寝息を立てて当然だった。

しかし俺は、そんな平和な一時を、激しい痛みで一気に起こされ飛び上がった。その痛みは右の鼻の穴の奥の方から、ズキズキと訴えてきていて、涙を流しながら俺は鼻を押さえ、治まらない苛立ちでジダンダを踏んだ。

ただ寝ていただけなのに何があっただんだ？

俺は懐中電灯で鼻の穴の中を照らして、鏡を見た。

何やら茶色く艶のある物が、なんとなく見てとれたが、それが何だかはわからなかった。

俺は何とかそれを取ろうとして、楊枝やピンセットなんかを使って試してみたが、全然話しにならなかった。

しばらく痛みの苦しさから、唸り声を挙げていると、どこからともなく、ノンキな鼻歌が聞こえてきた。

はやく芽を出せ柿の種。出さぬとハサミでちょん切るぞ。

俺は自分がこんなに苦しんでいるのに、と頭に来て、その歌声の主を探すと、バケツに水をナミナミ入れて、かなり大変そうな表情をした赤いカニが、俺の鼻の穴に向かってやってきたのだった。

俺はそれが、何を意味しているのかわからなかった。

そしてそのカニを、捕まえみようかと、考えてもみたが、あまりの変わった出来事に痛みも忘れて、少し見入ってしまったのだった。カニは持ってきたバケツを構えたかと思うと、それと、俺の鼻の中に水を一気に流し込んだ。すると俺の鼻は嘘のように痛みが引き、逆に不思議なことに気持ちよくさえた。

俺は目を丸くして驚いた。

しかし、それでも問題の元の元は解決した訳ではなかったが、別に予定もなかった俺は、とりあえずこの状況をそのまま放っておき、どういう展開になるか観察しだしたのだった。

カニはそんな俺のことに気付く様子もなく、また水を汲みにどこかに出かけるようだった。

自分とほぼ同じくらいのバケツを、器用にハサミで持ちながら、えっさえっさとうまくバランスを取って進んでいくそのサマを、俺はまるで見送るかのように、姿が見えなくなるまで目で追い、また縁側で寝そべった。

いつの間にか俺はまた、うとうとと寝ていたみたいだが、鼻の穴の中が無性にくすぐったくなったことが気になり出して目を覚ました。その何とも言えないこそばゆさは、どう鼻を擦ってもなくならず、また俺は懐中電灯片手に鏡の前に立って、鼻の穴の中の様子を覗いた。

すると、その何だか分からない物ほとんどもないことをしでかして

いて、俺はまた目を丸くした。

なんと鼻の穴の中の中には立派な芽が生えていたのだった。

俺は思った。こそばゆいハズだ。

しかし、そうだ、今ならその芽を引っ張れば、鼻の穴の中にある物全てが抜けてくるんじゃないか？

俺はそう思い、何とかそれを摘もうと何度か試みたが、それがなかなか思ったよりもしぶとく、指先に触れるものの、届きそうで届かなかった。

ヤキモキしながらそうこうしていると、あのノンキな鼻歌がどこからともなく聞こえてくるのに気付कि、俺は今までせわしく動かしていた手を、まるでいたずらでもしていたかのように後ろに回して、背中に隠した。

そこへ例のカニがまたバケツにいっぱいの水を入れ、俺の鼻に近寄ってきたのだった。

カニはまた、俺の鼻に着くなり、えいっとバケツの水を放りいれると、おおっ！芽が出てきた出てきた。すごいすごいと、さも嬉しそうに俺の鼻の穴の中を覗き、今度はかなり軽快なステップで、また、水を取りに行くのだった。

はーやく木になれ柿の芽よ。ならぬとハサミでちょん切るぞ。とご機嫌で。

そんな姿のカニの背中を見ていると、何だか俺は、自分のしようとしていたことが恥ずかしくなり、仕方なく、カニのしたいようにさせることを決めたのだった。

だが、しかし何より、その水のかけられた後の鼻の穴の中ときたら、もう、うふふっ、癖になりそうだった。

俺はまたまたコックリコックリと寝ていたようだが、今度は何か鼻がギシギシと音を出すせいで、うるさくて目が覚めた。

俺は今度はどうしたのかと自分の鼻に手をやると、なんと、それは

それは、立派な盆栽のような味わいさえ感じられる柿の木が、俺の鼻の穴の中から、緑豊かな葉っぱを茂らせ伸びていた。

俺はまるで貫禄のあるヒゲにも見えるその柿を、優しく撫でてみた。力強い太い枝はまるで、それに答えるかのように、少し踏ん張ったかと思うと、その力が波を打って枝の先の方へ走るのを、追いかけるようにポコポコポコと、それはそれは甘そうな柿の実を沢山ぶら下げだしたのだった。

俺はあまりの見事さに身震いし、ワクワクする傍ら、重さを増した柿の木が倒れないようにするのに必死になった。

鼻の穴にかなりの力を入れ、木全体を支えて、その痒さに耐えた。

そして、その痒さを、何とかごまかすためにと銘打って、柿の実を一つ食べようと手を伸ばした。

しかし、その瞬間、またどこからか、あのノンキな歌が聞こえてきたのだった。

はーやく木になれ柿の芽よ、ならぬとハサミでちょん切るぞ。

俺はまた慌ててその手を引っ込めた。

カニは少し離れたところから、柿の木が立派に立っているのに気付いたらしく、持っていたバケツを投げ捨て、すごい歓声を挙げながら、本数の多い足を必死に動かして、俺の鼻、いや柿の木に近づいてきた。

カニはすごいすごいとびょんぴょん跳ねた。

そして、舌を口の周りに一周ペロリと舐めたかと思うと、勢いに乗った横歩きで、一気に柿の木に登り始めた。

そして、慎重な眼差しで、その柿を吟味しだしたカニは、どこから出したのか、片手にカゴを持ち、甘そうに熟した柿の下にそれを構えると、もう片手のハサミでチョキンと柿を取り始めた。

キラリと光るそのハサミの切れ味といったら、ただならぬ鋭さで、俺はその手入れの行き届いた輝きに、職人技を感じて感動してしまふほどだった。

しかし、そんなことに魅とれていると、カニの取る柿の量が、想像

以上に多く、良いところをみんな持つていかれてしまう不安に駆られ、初めて俺は、ことの重大さに気付き始めたのだった。

確かに植えたのも、育てたのもカニに違いなかったが、しかしながらその場所は紛れもなく俺の鼻の穴だった。

そうだ。俺にだって貰う権利はあるはずだ。

俺はあまりのやりたい放題のカニにだんだんと頭にキだし、何かカニを追いかつ良い方法はないかと考え、そしてイチカバチかの賭けに出た。

俺はさつきから我慢していた、痒さからのくしゃみを、思いつきり息を吸い込み、右の鼻の穴は力んだまま、左の鼻の穴からだけ風が出るように用意をし、カニのやつがそちら側の枝に来るのを待った。カニは俺の思った通り、左側の鼻の穴の前に伸びた枝にまんまとやってきて、まるで踊るかのように、ワイヤーアクション顔負けの動きで、柿を夢中で取り始めた。

俺はそれを見て、コイツはカニにしておくのが惜しいと思ったが、それはそれ。

食欲には勝てない相談だった。

俺は容赦せずに、渾身の一発を放ったのだった。

カニは丁度イイ具合に、それに何も警戒していなかったせいもあり、回転しながら跳び上がって、少し上にある、金色に輝いた柿にハサミを入れようとしていたところで、その風を受け、しがみつくことさえ出来ずに、間抜けな格好で飛んでいった。

俺はその勝利と、あまりのタイミングの良さ、そしてカニの間抜けな格好に笑い、ガッツポーズを決めたのだった。

柿は素晴らしい味だった。

いや、そんな言葉が通用する代物ではない。そもそも言葉で表すこと自体が間違いなのかも知れない。

そんな小さな器に納まる柿ではなかったのだった。

こんな柿は奇跡に近い。

まあ、鼻から育った柿なのが、そもそもそうなのだが。

俺は一つもぎ取ると、用意したナイフで綺麗な多面形に皮を剥き、口に放り込み、歯応えとともに絶品に酔い知れる。それを何個も何個も飽きずに続け、やがて腹は満たされ、また瞼が重くなってきたかと思うと、うつらうつら寝てしまふのだった。

俺は騒がしい声が気になり目を覚ました。

しかし何かに押さえつけられているようで、動けなかった。

俺は必死にもがこうと、体のあらゆる所に力を送ったが、ビクともしない。

おかしい。

何とか動かせた頭で右手を見ると、そこには栗が、毬栗がなる木が、いや、右手、いややっぱり栗がなる木があった。

そして、左手には綺麗な花が咲き乱れ、そこにはハチが集まっている。

そしてうつ伏せになった背中にはどうやら、臼を造るのにぴったりな太さの檜の木が、そびえるように立っていた。

俺は思った。一体俺はどうなってしまったのだろう。

頭を起こしていることがだんだん辛くなって、そんな無理な姿勢のせいか、頭が何だか痛くなってきた。

頭を押さえようにも手が動かない。体を起こしたくても立ち上がれない。そこへ、カサカサと、そんな俺の顔の前に、小さい力二が何匹もやってきて、俺の鼻にたかってきたのだった。

俺は近すぎるその力二が、何をするのか寄り目で見守っていると、その力二達は言い出した。

これは父様の柿の木だ力二。父様が亡くなってしまった今は、僕らの柿の木力二。

そう力二、そう力二！

持つて帰る力二！

根こそぎ、全部持つて帰る力二！

すると力二達は、輝く鋭いハサミを一斉に突き上げ、次の瞬間、俺
鼻めがけて一気に、

俺はやめるーっと、力の限り叫ぶと、目を覚ました。

汗だくになった体を起こして周りをキョロキョロ見回した。
夢か。

俺はほっとして、縁側にある盆栽に目をやる。

あーあっ！

体を、手を、足を、思いつ切り広げて伸びをする。

イヤな夢だったな。

洗面所に顔を洗いに行き、ふと、鏡に写った俺の顔。
か、顔！

そこには鼻が、鼻がきれいに取られた顔があつた。

俺は目を丸くした。

すると、どこからともなくノンキな歌が聞こえてきた。

どーこに植えよう柿の種。 なつたら美味しい柿の種。 一人で食べた
ら鼻切るぞ。

俺はつばを飲み込み、微かに残るあの味を思い出し、歌の主を探し
始めた。

鼻は、鼻無いけど耳ならどおだあーっ！

おしまい。

いかがでしたか？

今日のオススメのカクテルの味は。

またのご来店、心よりお待ち申し上げます。では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4310d/>

ラブカクテルス その43

2011年1月16日06時53分発行